〈研究ノート〉

「円形竹管文」の再検討

—— 今井道上II遺跡および荒砥北三木堂II遺跡出土土器の観察から ——

原　　雅信

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

1．はじめに
2．今井道上II遺跡出土土器の観察
3．荒砥北三木堂II遺跡出土土器の観察
4．円形竹管文研究史
5．今後の課題

—— 要　　旨 ——

竹管文とは「竹又は中空の植物の茎を施文具とした種々の圧痕」(麻生1953) であり、円形竹管文は、縦割した円形断面の施文具を押捺（刺突）して表出される文様ということが一般的な理解となっている。

しかし、研究史を辿ると半截竹管の回転により表出される「円形竹管文」も存在することが注意される。「円形竹管文」について、施文具や施文法について十分な観察が行われてきたかは疑問であり、単純な文様であることから、あまり注目されず、その観察もやや等閑視された観も否定できない。竹管文の観察経過から「円形竹管文」について再検討する必要性を提起したい。

キーワード

対象時代　縄文時代

対象地域　群馬県他

研究対象　竹管文

1．はじめに

縄文土器の文様要素には、縄文、沈線文、隆線文、刺突文等の種類がある。多種多様な文様は、施文具と施文手法の組み合わせにより決定され、その集合として文様帯が形成されることになる。文様観察に際しては、縄文原体とその施文方位、文様施文方法や文様構成等、詳細に記載される。これらは、長年にわたる研究の積み上げにより定式化されるものとなり、共通認識が形成される文様も多い。しかし、詳細な観察と同時に定式化された文様として理解されることで、個々の文様施文の特徴をみのがしてしまう場合もありうる。特に土器型式の判別に直接左右しないと考えられる要素についてはなおさらかもしれない。

今回観察した「円形竹管文」は、このような文様の一つであろうと思われる。

文様の見方として、稲田孝司はかつて施文具形態文様と施文具方位文様という二方向の視点を提示した（稲田1972）。施文具形態文様とは、施文具の形状そのものが文様として土器面に表出されるもので、縄文や押型文等を代表とする。施文具方位文様は、施文具の連続的押捺により表出される文様で、沈線文の類を代表とする。

このような見方でいえば、「円形竹管文」は施文具形態文様として理解されているものだろう。

しかし、これまでの研究の歩みでも明らかなように、「円形竹管文」と呼称される文様は、竹管等の縦截による環状施文具の刺突で表出されるものとは限定できないことがわかる。これは今回観察した土器でも認められることであり、すでに各報告例でもみられるように半截竹管の回転手法により得られる「円形竹管文」が存在するのである。

今回、今井道上II遺跡、荒砥北三木堂II遺跡の縄文土器の観察を契機に、文様施文について気付いた点をまとめておきたい。新たな観察視点ではないが、円形竹管文については、比較的等閑視されてきた観のある文様と考えたからである。

今井道上II遺跡（群埋文　2006）および荒砥北三木堂II遺跡（群埋文　2008）は、前橋市今井町に所在し、赤城山南麓の開折谷に面した台地上に所在する旧石器時代から近現代までの複合遺跡である。

今井道上II遺跡は、縄文時代前期および古墳時代中期の集落が調査された。縄文時代の住居は3軒で、いずれも諸磯a式期に位置付けられる資料である。

荒砥北三木堂II遺跡は、台地南縁辺に分布する古墳時代中期の集落および古式須恵器の出土等から、南方500mにある5世紀後半の大型前方後円墳である今井神社古墳との関連が注目されている。縄文土器は、土坑およびグリッドから出土したもので、草創期から後期が含まれる。

この2遺跡について、平成16年度から平成18年度にかけ、報告書作成に伴う資料整理が行なわれ、その際縄文土器の観察をする機会に恵まれた。

次に、これらの遺跡出土縄文土器の観察について報告する。この観察内容は、基本的にそれぞれの報告書に掲載してあるが、文様観察の基本的内容に係わることから重複する部分もあるが、記述しておきたい。

2．今井道上II遺跡出土土器の観察［図1］

出土した諸磯a式土器については、文様のバラエティは少ないが、竹管文を主とし一部に櫛歯状施文具による施文がみられる。竹管文は、平行線文、連続爪形文等が観察されるが、今回注目されるものは「円形竹管文」とされる文様である。文様構成は、縄文面に各種竹管文により単純な文様が表出される。しかし、その円形竹管文に特徴的な施文手法が観察された。

まず竹管文の分類についてみておきたい。竹管文の分類には複数の文献があるが、縄文土器全般を対象としたものとして西川博孝による分類を参考とする（西川1983）。

竹管文の観察基準として、原体・施文方法・施文角度の3条件を示し、分類を行なっている。これまでの竹管文に関する文様観察および分類方法の代表的なものといえる。以下、分類項目を掲げておく。

原体として、「I　円形竹管」、「II　半截竹管」、「III　劣截竹管」、「IV　多截竹管」、「V　特殊な竹管」の5分類とする。施文の方法は、「1　刺突文　原体を単に刺突したもの。」、「2　沈線文　原体を単に引いたもの。」、「3　押引文　1，2の動作を複合したもの。」、「4　特殊　交互に支点をかえて施文するもの。」となる。施文の角度は、「A　器面に直角にあてるもの。」、「B　器面に鋭角にあてるもの。」、「C　器面に鈍角にあてるもの。」という基準を示した。この分類によれば、円形竹管文は「I　円形竹管」を原体とし、施文は「1　刺突文」、その角度は「A」もしくは「B」、となる。

しかし、図1に示す「円形竹管文」資料の中に、この分類とは異なる例が観察された。

1は波状口縁の深鉢で、RL横位の縄文施文面に円形文が垂下する単純な文様構成の諸磯a式土器である。

ここに加えられる円形文であるが、個々の円形文を観察すると1ヶ所に粘土の盛り上がりが認められるのである。このような文様は「円形竹管」の「刺突」では表出されにくいであろう。円形文内に粘土の盛り上がりが境界状に残るような文様を「刺突」方法により表出しようとすれば、次の方法が考えられる。

原体とする円形竹管の1ヶ所に切れ目をもつ施文具を用いる方法と、半截竹管を円形になるように個々に刺突する方法である。今回の例についてもその可能性を考慮した。しかし、施される円形文の状態を詳細に観察する

と、円形文の末端がちょうど「の」字を描くようにもう一方の末端に重なっているような痕跡が残っていることが認められた。このような状態は、切れ目を有する円形竹管の刺突では得ることはできない［同図２部分写真参照］。

この円形文は、刺突という手法により施文原体の形状を刻印して得られる文様ではないとみられる。

円形文の末端が「の」字状となるという特徴から考えると、施文原体の回転手法により表出される文様であるといえる。回転手法を前提に施文法を復元すると次のような施文方法が考えられる。施文原体として半截竹管を用い、器面に対し直角にあて、さらにそのままの状態で回転することで、円形文を施す、という施文法となる。このような半截竹管による回転手法で施文すると、今回の例と同様な円形文を得ることができる。

しかし、実験的に復元をしたことでわかることだが、その施文効果は不規則で一定したものではないことに気がつく。施文原体を１回転以上回転してしまうと、円形竹管の刺突によるものと同様な円形文が形成され、円形文内には回転手法による痕跡は残らない。また、１回転する手前で止めてしまえば、「C」字状の文様が施されることになる。

円形文の末端が「の」字状となるためには、半截竹管を器面に押し当て、回転させ、１回転する直前で施文を完了する必要がある。円形文内の筋状の粘土の盛り上がりは、最初の押圧の際の粘土が、回転により押されて残ったものである。１回転以上すると、筋状の粘土の盛り上がりが削り取られてしまい、一見すると押捺による「円形竹管文」に類似するものとなる場合もある。しかし、実験的に施文してみると半截竹管を押捺し、回転しはじめると、手の動きがちょうど１回転前後で無理なく施文が完了できるように感じる。そのため、実際の文様でも、筋状の痕跡が円形文内に残るということかもしれない。

円形文内を観察すると、右回転が多いことがわかる。右手を利き手とする製作者による結果なのだろう。

なお、この報告段階では次のように「円形竹管文」を整理した［図１－３　参照］。

A　円形竹管を施文具とし、施文方法は押捺によるもの。

B　半截竹管を施文具とし、弧状部を対置して刺突し、円形文を施すもの。今回の観察資料では認められないが、施文方法として可能性はあろう。

C　半截竹管を施文具とし、回転手法により円形文を施すもの。円形文内に粘土の盛り上がり等の回転痕跡が観察され、複数の円形文が施される場合は、形状に差異が生じるものが見られる場合が多い。

さらに、回転量も円形文表出に影響をもつ。

a　１回転する手前で施文を完了する場合。

b　１回転で施文を完了する場合。

c　１回転以上する場合。

３．荒砥北三木堂Ⅱ遺跡出土土器の観察［図２］

諸磯ａ式土器を中心として文様の観察を報告する。

⑴　肋骨文を施す土器

図２－４、５、６、７は接合関係はないが、文様や胎土等が類似することから同一個体であると観察される。この資料を中心に文様や施文法について記載し、他の土器についても触れながら特徴をみていきたい。

４、５、６、７は櫛歯状施文具による肋骨文が施されるものであるが、文様等について施文順序により①から⑥の段階に従って観察していく。

①縄文が器面全面に施される。RL 横位であるが、節の形状を観察すると０段多条であろう。文様と重複し、観察部分が限定されるが、おそらく０段３条とみられる。原体は幅２㎜程度である。４は１条ごと深い条が現れ、一見すると附加条のようにみえるが、同片および他破片を観察すると、やはり正撚２段の RL（０段３条）であることがわかる。附加条にもみえる不安定な条走行は、２段時の撚りが不均一のため一方の条にのみ撚りがかかり、もう一方の条に巻きつくようになった部分で施文されたためである。他片のように条が整然とする部分もあることから、同一の原体に撚りが均等の部分と、不均等の部分があったのだろう。用いる繊維がやや硬質のため、捻転性が不良で末端部で撚りが不十分であったことによる。条に対する節の傾斜が強いことも同様に用いる繊維の性状によるものだろう。

②次に単一沈線による垂線を施す。６では垂線間が3.2㎝から４㎝程度であることから、四単位の波状口縁であれば、波頂部および波底部からそれぞれ垂下することになる。施文は半截竹管の片側のみを使用することでも施文は可能だが、平行線となる部分は認められないことから、先端の細い棒状施文具によるものとみられる。別個体であるが、８では、垂線を平行線文とし、半截竹管文を使用する例も存在する。

③肋骨文は、垂線間を下弦の弧状文により繋げることで構成する。この弧状文は３条が同時に引かれることから、先端部が３本の櫛歯状施文具が使用される。さらにこの櫛歯文は３条の上位の弧状線のみが深めとなる。この深浅の差はわずかなものだが、肉眼でも区別できるもので、各弧状文とも同様に上位の弧状線が深めである。施文具や施文法に起因するものだが、規則的な文様となっていることから、文様形成におけるアクセントとみることができ、効果を意図した施文手法と考えられる。３本のうち１本が長めとなる櫛歯状施文具を用意し、使用したのだろう。施文方位は、観察できる部分では、左側が起点で、右方向へと弧状文が施されている。

④垂線と弧状文の交点に円形文が施される。この円形

文は、形状がやや不規則なものがみられる点や全周しない部分がある点、底面の深さが不均一である点、また円形文内側にの字状の粘土の軌跡が残る点から、半截竹管の回転により施文されたものである。円形文をもつ例は８、９、10、11がある。11は残存状態が不良のため確定できないが、他例は刺突手法ではなく、やはり半截竹管の回転により表出される文様である。

円形竹管文は縄文時代各時期に認められ、その中には半截竹管の回転押捺により施される例も報告されている。しかし、多くの例は円形竹管の刺突により表出されるものとされている。現状でいえば、円形竹管文には、円形竹管の刺突によるものと、半截竹管の回転手法による２種類の施文法があり、回転手法は少例という理解が一般的のように思われる。しかし、注意して円形竹管文が施される資料の報告例をみると、回転手法によるものと観察される例が決して少なくないことに気がつくのである。単純な文様であり、文様構成の主要な位置を占めないことから、あまり注意されてこなかったのだろうか。特に、前期の例ではその傾向が強いように思われる。今回の遺跡例では少例であり、全体的な傾向について言及することはできないが、問題意識の一つとして周辺地域の出土資料について注意していく必要があろう。

課題としては、時間差や地域差による文様技法の相違なのか、表出技法に複数存在するのではなく、同一技法となるのか、という点について観察する必要がある。

当面は、半截竹管の回転によることが明らかなものを円形文として、いわゆる「円形竹管文」とは分けて呼称しておきたい。

⑤頸部に横走条線文が施される。櫛歯状施文具が用いられるため、一見すると肋骨文施文と同様の櫛歯状施文具のようにみられるが、条線間隔に相違が認められることから、異なる施文具が使用されていると考えられる。両端部に半截竹管による刺突文列が巡るため、単位が観察しにくいが、４条単位の櫛歯状施文具が使用されるとみられる。

⑥頸部の横走条線文帯の上下端に沿って、刺突文列を加える。半截竹管を施文具とし、器面に対し30°前後の角度で左から右方向へ連続施文される。施文間隔は５㎜前後である。この刺突文は、器面に施文具端部を押し付けるように施すことで、逆コの字形の軌跡となる。施文具である半截竹管の幅が４㎜弱であり、円形文の施文具とほぼ一致するところから、同一の施文具により文様表出された可能性が高い。

以上のように、肋骨文を主文様とする土器の文様と施文具についてみていくと、棒状施文具（垂線）、３本櫛歯（肋骨文）、４本櫛歯（横走条線文）、半截竹管（円形文・刺突文）および縄文（０段３条RL）という複数の施文具が使用されることがわかる。文様表出には、それぞれ施文するための施文具が用意され使用されたのであろう。

⑵　垂線と円形文を施す土器

円形文をもつ８をみてみよう。半截竹管による垂線を施し、その上に半截竹管の回転施文である円形文が加えられる。この例でも、半截竹管という施文具は同様であるものの、垂線と円形文では異なる施文具が用いられている。垂線を施すための幅５㎜程度の半截竹管、円形文を施すための幅９㎜程度の半截竹管がそれぞれ使用されている。これも、先の例と同様にそれぞれの文様表出には、それぞれ施文具が用いられたことになる。

⑶　連続爪形文と山形文を施す土器

次に10についてみてみよう。この資料は、連続爪形文間に山形文を施し、胴部に円形文を加える単純な文様構成である。口縁部文様について、①から⑤の施文順序に沿って文様を観察していく。

①縄文が施される。RL横位であるが、条走行はやや不規則であり斜位に近い施文部分もみられる。施文状態があまり良好ではないが、２条ごとにやや細い条が１条規則的に観察される。１段３条RLとなるが、種別について、正撚もしくは附加条第１種か判断できない。

②平行線文が施される。幅３㎜程度であるが、平行線をみると断面がかまぼこ状を呈する。線刻は浅めであることから、半截ではなく四分割程度の竹管が使用されたものとみられる。平行線は1.5㎝前後の間隔で３条巡り、２帯の区画が形成される。口縁部に沿って平行に巡るが、つなぎ目部などでやや歪みが生じる場所もみられる。

なお、下位の平行線文は輪積み部に沿って加えられる。

③平行線文上に連続爪形文を施す。幅３㎜程度で、平行線と同様の四分割竹管が用いられるものと観察される。器面に対して30°程の角度で加えられ、印刻は深めである。

④平行線文と連続爪形文により区画された部分に山形文が施される。幅３㎜程度であり、平行線文や連続爪形文と同様の施文具とみられる。かまぼこ状断面を呈し、平行線間の器面上には擦痕が残ることから、やはり４分割程度の竹管を施文具としたものと観察される。山形文の施文方位は左側から右方向へ展開している。

なお、口唇上端部の刻目は、文様施文の施文具背部の押圧により表出することが可能だろう。

⑤胴部に円形文が縦位に施される。1／2が欠損するため施文法は確定できない。しかし、回転手法によるものとすれば、口縁部文様と同様の施文具（４分割程度の竹管）で施文は可能であると考えられる。

以上のように、本資料は、施文工程の②から④は同一施文具により文様が施文され、⑤についてもこれに含まれる可能性が高い。この資料は、４分割程度の竹管という同一施文具により各文様が施される例といえる。

⑷ 竹管文の特徴について

このような竹管文の観察をとおして、諸磯ａ式土器にも、それぞれ異なる施文具を用い個々の文様を表出して肋骨文を施す例（４、５、６、７）や垂線と円形文を組み合わせる例（８）や、同一施文具を用いて爪形文や山形文を組み合わせる例（10）が存在することがわかる。

このような文様施文時の施文具のあり方の相違は何に起因するものなのであろうか。文様の種別に関連するものか、地域的なもしくは時間的な要因を反映しているものか、今回の資料からはその意味は特定できないが、なんらかの有意性をもつものと考えられる。

加えて、荒砥北三木堂Ⅱ遺跡例からも「円形竹管文」が円形竹管の刺突によるものか、「円形文」とした半截竹管の回転手法によるものか、注意をする必要があることが指摘できる。単純な文様であるとみられがちだが、竹管文の観察にはポイントとなる文様といえる。

４．円形竹管文研究史

今井道上Ⅱ遺跡、荒砥北三木堂Ⅱ遺跡出土縄文土器の観察内容は前項のとおりである。破片資料を中心にした個別文様の観察にとどまるが、特に諸磯式土器の竹管文の施文方法に注意した。これらの観察を通じて、「円形竹管文」について再検討する必要が生じたのである。

「円形竹管文」は、縄文土器の主要な文様との位置づけとならず、「点」としての文様という位置づけにあった。そのため、それぞれの土器文様中の「円形竹管文」にはあまり注意が払われてこなかったのであろう。

研究史にその理由を探ろうとしているが、現状では文献検索等が不十分であり、概要にとどまるが略史として辿っておきたい［表１　参照］。

なお、「円形竹管文」は文様要素としては、草創期から晩期に至るまで断片的に認められるものであり、さらに土器ばかりではなく、土偶等を含む土製品にも加えられる場合もある。研究史を辿るにあたり、「竹管文系土器群」と称される前期土器（諸磯式土器）が中心になるが、基本的に時期や遺物種別を限定せず、調査する必要があるものと考えている。

諸磯式土器は、大正時代に厚手式土器、薄手式土器等と同様に縄文土器の分類の一つとして着目された資料である。大正10（1921）年榊原政織「相模国諸磯石器時代遺蹟調査報告」により注目され、大正13（1924）年谷川磐雄「諸磯式土器の研究」（１）～（３）により「日本石器時代の遺跡遺物に、一派を劃すべき必要の存する事」と位置づけられた。大正時代にあっては、鳥居龍蔵による同時代異部族論に主導され、縄文土器は先住民族によるものと理解されていた。厚手式（派）、薄手式（派）はそれぞれ山岳部族と海岸部族と理解され、それに出奥式や諸磯式が存在するものであった。さらに各式には文様の単純、複雑さの比較や出土層位の関係等も問題とされ、時間的前後関係も視野に入っていた。

谷川は諸磯式土器の出土遺跡地名、文様の特徴等を概観しながら、文様については、拓本図の掲載と縄文、竹管文、爪形文等の説明が加えられている。ここでは、「竹管文」と呼称する文様は円形竹管文を指している［図２－12］。なお、この中には「連続半円状は、一点を中心にしてあるコムパスの如きもので描いた事がわかる」として、コンパス文の存在も指摘している［図２－13］。

その後、諸磯式土器論争とも呼ばれる年代的位置づけを巡る研究段階を経過し、1928（昭和３）年山内清男「下総上本郷貝塚」により編年的な位置付けが確定する。

この間、前期土器の文様に関しては竹管文、円形竹管文、円文、半截竹管文、爪形文等の名称が使用一般化していくことになる。

1953（昭28）年、麻生優「竹管文に関する試論」により、竹管文の分類、分析が行なわれた。竹管文を「竹又は中空の植物の茎を施文具とした種々の圧痕」と定義し、さらに円形、３截、４截、５截、多截に分けると共に、施文の角度や方向等に着目し分析した。麻生の竹管文分類、特に縦截数による細分は一般化するものではなかったが、「円形竹管文」および「半截竹管文」は文様名称として広く使用されるようになる。谷川により呼称された竹管文は円形竹管文と半截竹管文とに呼び分けられることになった。

佐原　真は、竹管文の施文方向を分析し、利き手について考察を加えた（佐原　1955・1956）。また、半截竹管文について外側竹管文、内側竹管文に大別し、「関東では、凡そ、早期及び中期以降が、外側竹管文、前期が内側竹管文」（佐原　1955）との年代的変遷を概観している。佐原の分析は、文様の施文方向や利き手に主眼がおかれることから、「施文原体を土器面に対し垂直に刺すことによって生ずる竹管紋は材料として用い難い。」（佐原　1955）として、いわゆる円形竹管文については考察から除外されている。なお、竹管文については「竹管を垂直に押しつけたのが円形竹管紋」、「半分に割って使えば半截竹管文」、「細かく割ったものを《多截》」と分類していることが後の文献でわかる。（佐原　1981）

麻生、佐原の竹管文に関する分析により、この文様に対する認識が整理され、施文具および施文法等は現状でも基本的に引き継がれている。

その後、『村山遺跡』により、麻生や佐原の竹管文分類に含まれていない「円形文」が報告されることになる（塩野　大野　1960）。この資料は「第10類　諸磯ｂ式類似土器」の中に指摘されるもので、「この円文は、前類の竹管を押した円文とは趣の異なるもので、おそらく半切竹管の回転による圧痕であろう。」［図２－15］と観察している。前類とは「第９類　諸磯ａ式類似土器」の「（ｂ）竹

管円文土器その他」[図２－14]であり、円形竹管の押圧によるものを一括する。

回転による円文については、別項に「半切竹管を回転させた環文」という表現もある。なお、この土器は同報告書の表紙にも掲載されている。

この報告書により、いわゆる円形竹管文と呼ばれるものには、円形竹管の押圧による「竹管円文」と、「半切竹管」の回転圧痕による「円文（環文）」の２種類が存在することが指摘されたことになる。報告中にはこの円文の特徴は「線の切れこみが鋭く、円の形態も相互に多少異なっている。」とし、発生理由として「こういう手法のヒントは、異方向の爪形が同一文帯上で相接した場合の形から、容易に得られたものであろう。」と分析した。また、円文（環文）は「諸磯ｂ式類似土器」とともに「本来のものと異なる、ローカルな」ものとの位置づけを行なった。

村山遺跡は岐阜県に所在し、1951（昭和26）年に発掘調査された。遺物整理は1953（昭和28）年に東京大学理学部に席を移して行なわれた。担当者である大野によれば、整理に際しては山内清男による指導を受け、報告書の「草稿の御校閲までしていただき、いろいろ重ねてのご教示を賜った。」とのことである。また、同教室駒井和愛、八幡一郎にも指導を受けたと述べている。報告書は1954（昭和29）年には完成していたが、諸事情により刊行が1960（昭和35）年となってしまったという。つまり、1953年の麻生、1955、1956年の佐原による竹管文研究と同時期に執筆されていたことになる。

麻生、佐原は、円形竹管文としては円形竹管の押圧による施文法が紹介されるが、村山遺跡例にある半截竹管の回転施文には触れていない。村山遺跡の報告書は1960年刊行だが、資料整理は1953年に東京大学理学部において、山内の指導を受けながら進められていた。佐原も竹管文に関しても「私は施紋法の多くを山内先生、その他の先輩に学んでいる。」（佐原　1955）とあるように、山内の指導を受けていた。文献上は触れられていないが、佐原も山内を介して、村山遺跡例を知っていた可能性は高い。さらに、佐原と大野は前期土器の分析にあたり北白川下層式土器について京都大学、東京大学の保管資料を実見している。特に東京大学資料は山内により共通の資料を参考資料としていると思われ、接点は少なくなかったはずである。しかし、「回転による円文」については、佐原の以後の竹管文の記述にも触れられることがない。考古資料を詳細に観察する佐原にあって、この点は極めて不思議なことであると思う。

以降、「円形竹管文」は、円形施文具の押捺（刺突）により得られる文様として一般化していく。

そのような動向の中、回転手法による円形竹管文の報告も断片的ながら認められることは重要である。現状では、文献検索が不十分のため、遺漏が多いが確認されたものは次の報告例がある。

林謙作は、福島県宮田貝塚出土土器（関山式土器併行）について「頂点・交点に円形竹管文（半截竹管を回転したもの）を施文している。」[図２－16] と解説した（林1982）。

佐々木保俊は、埼玉県打越遺跡出土土器に「円形竹管文」とともに「半截竹管を回転して得られた円文」を施す関山式土器を報告した（佐々木　1982）。

山口逸弘は、群馬県房谷戸遺跡の勝坂式土器に「半截竹管による小円」（群埋文　1989）を観察している。

すなわち、半截竹管の回転による「円形文」が最初に指摘された諸磯式土器ばかりではなく、前期前半の繊維土器や中期にも存在することがわかる。このことから時期的、地域的に限定される文様表出手法ではなく、さらに広く存在する可能性が伺われるのである。

現状では、「円形竹管文」には、円形施文具の押捺（刺突）によるものと、半截竹管の回転によるものの両者が存在する理解ができる。しかし、回転手法は圧倒的に報告例が少ない。このことが、円形竹管文の実態であるかは疑問が残る。ここに、「円形竹管文」の再検討の必要が生じるものと考えている。

５．今後の課題

「文様における施文効果は、施文原体と相関関係にあるから、その理解は、原体の復元を通して行なわなければならない。」「竹管文に於ける個々の文様は、大略施文原体と、それに加えられる施文手法（器面に当てる角度）とによって決定される。」（多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅶ　1969）との指摘どおり、施文具もしくは施文手法を排除して、効果としての表出された文様のみでは、本来の文様理解とはならないだろう。施文具・施文手法・文様という一連の工程を理解することで、文様の正確な把握ができるものと思う。

今回取り上げた円形竹管文は、単純であるがために、また主要な位置を占めるものとは考えられていないことから、個々の文様観察が不十分であったと考えるにいたった。さらに、研究史の理解もやはり不十分であった。半截竹管の回転による表出技法は「円形竹管文」としては少数派であるいう認識は、文様観察や研究史的理解が不十分であったという点が影響していると考えている。自らもこのことについて認識が不十分であったことは、大きな反省点でもある。今井道上Ⅱ遺跡、荒砥北三木堂Ⅱ遺跡出土土器の観察を契機に、再検討する必要性を痛感した。今回は、土器観察により得られた竹管文についての紹介にとどまるが、次の点を今後の課題として提起しておきたい。

①竹管文の研究史的解題を行い、問題の所在を明確に

する必要がある。詳細な観察を前提とする土器研究にあって、竹管文研究を再確認しなければならないだろう。

②土器をはじめとして各種土製品等に表出される「円形竹管文」の再検討が必要である。円形竹管の押捺による文様と半截竹管の回転による文様とでは、「円形」という共通する文様形状が得られるとはいえ、施文具、施文方法とも全く異なる。両手法の関連について具体的に考察を加える必要がある。

以上、この2点を解決すべき課題とし、今回のまとめとしておきたい。

謝辞

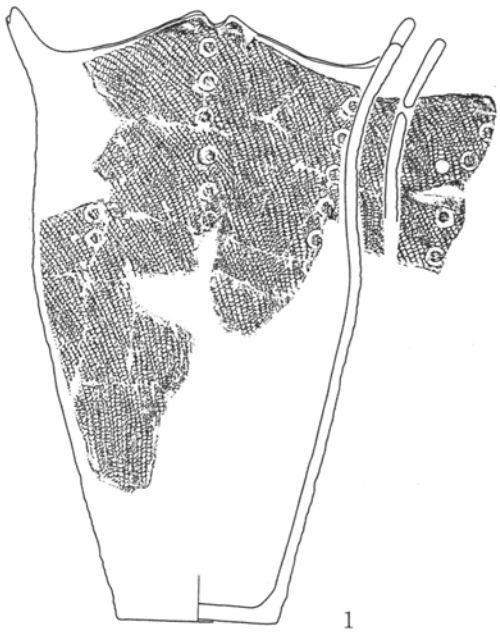
今井道上II遺跡、荒砥北三木堂II遺跡の土器観察および図版等については整理担当者小島敦子氏に配慮いただきました。記して感謝いたします。

参考文献

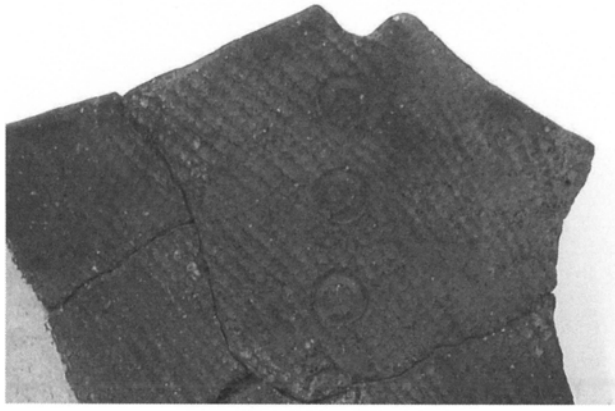
榊原政織　1921「相模国諸磯石器時代遺蹟調査報告」『考古学雑誌』11（8）：1-23
甲野　勇　1924「武蔵国橘樹郡生見尾村貝塚発掘報告」『人類学雑誌』39（4•5•6）：184-199
谷川磐雄　1924a「諸磯式土器の研究」『考古学雑誌』14（9）：38-43
谷川磐雄　1924b「諸磯式土器の研究（2）」『考古学雑誌』14（11）：23-33
谷川磐雄　1925「諸磯式土器の研究（3）」『考古学雑誌』15（1）：26-50
岩沢正作　1926「諸磯式土器について」『上毛及上毛人』（114）：1-8
山内清男　1928「下総上本郷貝塚」『人類学雑誌』第43巻第10号　p.463-464［山内清男先史考古学論文集第二冊　p.97-98　1967　先史考古学会に再録］
角田文衛　1935「羽後角間崎遺跡の土器」『史林』24（3）：130-139
甲野　勇　1935「関東地方に於ける縄文石器時代文化の変遷」『史前学雑誌』第7巻第3号　p.1-63（『甲野勇集』日本考古学選集20　p.12-77　1971　築地書館に再録）
加藤　孝　1951「宮城県上川名貝塚の研究」『宮城学院女子大研究論集I』p.183-197
麻生　優　1953「竹管文に関する試論」『上代文化』（24）：13-20
佐原　真　1955「先史時代に於ける右手の優越」『阿修羅』創刊号（『佐原真の仕事2　道具の考古学』2005　p.80-100　岩波書店に再録）
佐原　真　1956「土器面における横位文様の施文方法」『石器時代』（3）：25-36
塩野雅夫　大野政雄　1960『村山遺跡』斐太中央印刷株式会社
渡辺　誠　1962「阿武隈山中発見の縄文文化前期の土器」『考古学雑誌』46（4）：44-46
鎌木義昌編　1965『日本の考古学II　縄文時代』河出書房新社
興野義一　1968「大木式土器理解のためにIII」『考古学ジャーナル』（18）：8-10
可児通宏　1969「A　竹管文の分類」『多摩ニュータウン遺跡調査報告VII』p.33-37　多摩ニュータウン遺跡調査会
稲田孝司　1972「縄文式土器文様発達史素描・上」『考古学研究』（18）：9-25
岡野隆男編　1973『平台貝塚』早稲田大学考古学研究会
鈴木保彦・小宮　孟　1977「菊名貝塚出土の文化遺物と自然遺物」『神奈川考古』（2）：1-44
佐原　真　1981「縄文施文法入門」『縄文土器大成　3　後期』講談社　p.162-167
坪井清足　1981「解説」『縄文土器大成4　晩期』p.369-447　講談社
林　謙作　1982「主要遺跡・図版解説　71深鉢」『縄文土器大成　1　草・前期』講談社　p.163
小出輝夫　1982「花積下層式土器の成立と展開」『研究紀要2』p.17-31　富士見市遺跡調査会
佐々木保俊　1982「打越遺跡　169号住居址出土土器について」『研究紀要2』p.32-42　富士見市遺跡調査会
今村啓爾　1982「諸磯式土器」『縄文文化の研究3』雄山閣　p.211-223
新井和之　1982「黒浜式土器」『縄文文化の研究3』雄山閣　p.190-200
西川博孝　1983「竹管文」『縄文文化の研究3　縄文土器III』雄山閣　p.219-235
麻生　優・白石浩之　1986『縄文土器の知識I　草創・草・前期』東京美術
谷口康浩　1989「諸磯式土器」『縄文土器大観1』小学館　p.326-330
長沼　孝　1992「北海道の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集　p.52-70
可児通宏　2002「竹管文」『日本考古学事典』三省堂　p.567
建石　徹　2007『縄文土器　前期』日本の美術9　至文堂
1920『河内国府石器時代遺跡第二回発掘報告等』京都帝国大学文学部考古学研究報告題4冊　京都帝国大学考古学研究室
1956『信濃考古綜覧　下巻』信濃史料刊行会
1965『米島貝塚』庄和町文化財調査報告書第1集　庄和町教育委員会
1969『有明山社』長野県考古学研究会研究報告書9　長野県考古学会
1974『関山貝塚』埼玉県埋蔵文化財調査報告書第3集　埼玉県教育委員会
『柏市鴻ノ巣遺跡』財団法人千葉県都市公社
1975『宮田貝塚』福島県相馬郡小高町教育委員会
1978『よせの台遺跡』茅野市教育委員会
1982『細田遺跡』神奈川県教育委員会
1984『青宮西遺跡』福島県会津高田町文化財調査報告書第五集
1986『上大屋・樋越地区遺跡群』勢多郡大胡町教育委員会
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団（群埋文と略）
群埋文　1989『房谷戸遺跡I』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第95集
群埋文　2006『今井道上II遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第367集
群埋文　2008『荒砥北三木堂II遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第423集

表１　円形竹管文研究史

1920	大９	浜田耕作	河内国府石器時代遺跡第二回発掘報告等　京都帝国大学文学部考古学研究報告第４冊		「爪形紋様」「細き竹管其他を半裁したるものを用いしことも想像せらる」
1924	大13	甲野　勇	武蔵国橘樹郡生見尾村貝塚発掘報告	人類学雑誌39-４・５・６	「円形模様」竹管によるもの。
1924	大13	谷川磐雄	諸磯式土器の研究（２）	考古学雑誌14-11	「竹管文」―円形の竹管文が押捺される資料について呼称する。
1926	大15	岩沢正作	諸磯式土器について	上毛及び上毛人114	群馬県内の諸磯式土器の資料修正。
1935	昭10	角田文衛	羽後角間崎遺跡の土器	史林24-３	35は……上下に竹管文の列を加へた…。
1935	昭10	甲野　勇	関東地方に於ける縄文石器時代文化の変遷	史前学雑誌第７巻第３号	昭和初期の編年的土器研究の概説。「半裁竹管文」は「第５群（諸磯式土器）に於いて此の文様は極地に達する」
1951	昭26	加藤　孝	宮城県上川名貝塚の研究	宮城学院女子大研究論集Ⅰ	円形竹管文には説明なし。花積下層期。
1953	昭28	麻生　優	竹管文に関する試論	上代文化24	「竹又は中空の植物の茎を施文具とした種々の圧痕」円形竹管文、半截、３截、４截、５截、多截に分類。
1955	昭30	佐原　真	先史時代に於ける右手の優越	「阿修羅」創刊号/『佐原真の仕事２』	竹管文について「弦竹管紋」と「弧竹管紋」に分類し、主として利き手の問題に言及。
1956	昭31		信濃考古綜覧　下巻	信濃史料刊行会	「上原式土器」→「文様構成の中心空白部に圓形竹管文を押捺する。」
1956	昭31	佐原　真	土器面における横位文様の施文方向	石器時代第３号	土器への施文時の方向についての分析／竹管文（主として爪形文、刺突文）の施文方法の分析
1960	昭35	塩野雅夫　大野政雄	村山遺跡	斐太中央印刷所	第９類竹管円文／第10類　諸磯ｂ式類似土器「半切竹管の回転による圧痕」（表紙にものっている破片写真）／両手法が存在
1962	昭37	渡辺　誠	阿武隈山中発見の縄文文化前期の土器	考古学雑誌46-４	円形竹管紋（第二図10）（施文法については記述なし）
1965	昭40		米島貝塚　庄和町文化財調査報告第１集	庄和町教育委員会	円形竹管文が並べて押捺される。
1965	昭40	岡本　勇　戸沢充則	３　関東	日本の考古学Ⅱ　縄文時代	諸磯ａ式土器―竹管文土器群　半截竹管・円形竹管などの組み合わせによって各種文様が表現される
1968	昭43	興野義一	大木式土器の理解のために（Ⅲ）	考古学ジャーナル18	竹管円文、竹管を輪切りにして、押した円文は早期の大寺式や…ある。
1969	昭44	可児通宏	「A.竹管文の分類」	多摩ニュータウンⅦ	「原体を器面に直角に当て押捺したもの。」―「円形竹管文」　前期黒浜式、諸磯式に特徴的、中期には稀有
1969	昭44		有明山社　長野県考古学会研究報告書９	長野県考古学会	南大原式（諸磯ａ式）「円形文」　押捺手法/諸磯ｃ式：円盤状の粘土貼付し、竹管状工具で中の粘土を抜き取る手法。
1973	昭48	岡野隆男編	平台貝塚	早稲田大学考古学研究会	第２群第３類（諸磯ａ式）　円形竹管文土器　竹管（丸竹）の刺突文による円形文　円形文と丸形文の２種あり。
1974	昭49		関山貝塚　埼玉県埋蔵文化財調査報告書第３集	埼玉県教育委員会	円形竹管文
1974	昭49		柏市鴻ノ巣遺跡	財団法人千葉県都市公社	諸磯ａ式土器　「円形竹管文」
1975	昭50		宮田貝塚	福島県相馬郡小高町教委	花積下層式「円形刺突文」
1977	昭52	鈴木保彦　小宮　孟	菊名貝塚出土の文化遺物と自然遺物	神奈川考古第２号	「第６類　円形竹管文のほどこされるもの（30～35）」　花積下層式土器
1978	昭53		よせの台遺跡	茅野市教育委員会	「第７号住居出土土器」「諸磯Ｂ式」「円形竹管文」　拓本図でみると円形、Ｃ字形のものがあるようにみえる。
1981	昭56	坪井清足	解説	縄文土器大成４　晩期	412　滋賀里式　滋賀県滋賀里遺跡　円形竹管文をつけている。
1981	昭56	佐原　真	縄紋施文法入門	縄文土器大成３　後期	竹管を垂直に押しつける「円形竹管紋」、半分に割って使う「半截竹管紋」
1982	昭57	今村啓爾	諸磯式土器	縄文文化の研究３	横切りにした施文具による円形刺突文／竹管による円形刺突文
1982	昭57	新井和之	黒浜式土器	縄文文化の研究３	黒浜式土器第Ⅳ段階―沈線のかわりに円形竹管文を使用する例もあり…
1982	昭57	林　謙作	図版解説　71　（Ｐ163）	縄文土器大成１　早・前期	福島県宮田貝塚　関山式併行　「頂点・交点に円形竹管文（半截竹管を回転したもの）を施文している」
1982	昭57	小出輝夫	花積下層式土器の成立と展開	研究紀要２　富士見市遺跡調査会	「竹管刺突文」
1982	昭57	佐々木保俊	打越遺跡　169号住居出土土器について	研究紀要２　富士見市遺跡調査会	「円形竹管文」、「半截竹管を回転して得られた円文」
1982	昭57		細田遺跡	神奈川県教育委員会	諸磯式土器　「円形竹管文」
1983	昭58	西川博孝	竹管文	縄文文化の研究５	原体・施文方法・角度により分類。「円形竹管―直角にあてるもの・鋭角、竹管の外皮を器面にあてるもの・押引き」
1984	昭59		冑宮西遺跡　福島県会津高田町文化財調査報告書第５集		第Ⅰ群第１類早期前半　沈線文土器　円形竹管の刺突（68図２）
1986	昭61		上大屋・樋越地区遺跡群	勢多郡大胡町教育員会	円形刺突文
1986	昭61	麻生　優　白石浩之	縄文土器の知識Ⅰ　草創・早・前期	考古学シリーズ14	円形竹管文の説明は特に無し。
1989	平１	谷口康浩	諸磯式土器	縄文土器大観１	円形刺突文
1989	平１	山口逸弘	房谷戸遺跡Ⅰ　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第95集		「半截竹管による小円」Ｐ264／前期土器に「円形刺突文が回転押圧される」の観察もある。
1992	平４	長沼　孝	北海道の土偶	国立歴史民俗博物館研究報告第37集	美々４遺跡出土土偶（晩期）「…肩、下腹部、腰の部分には円形の刺突文がある。」
2002	平14	可児通宏	「竹管文」	日本考古学事典	先端部断面がそのまま圧痕となる「円形（竹管）文」、縦割りにしたものを押し付ける「半截竹管文」
2007	平19	建石　徹	縄文土器　前期	日本の美術９　（№496）	半截竹管文の解説はあるが、円形竹管文の記述はみられない。

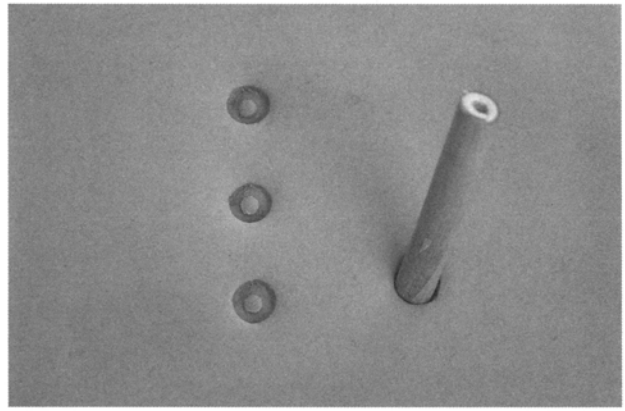


1



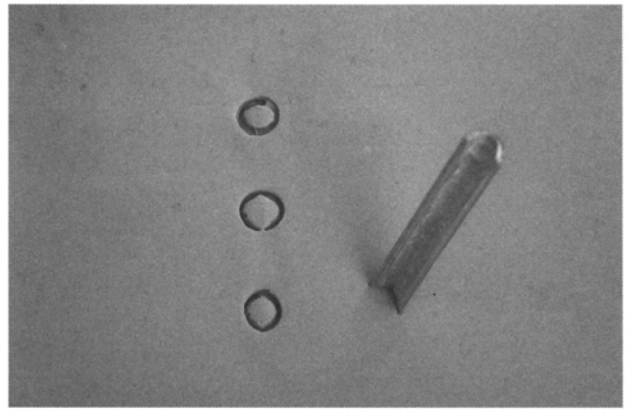
（1の部分写真）　2

A



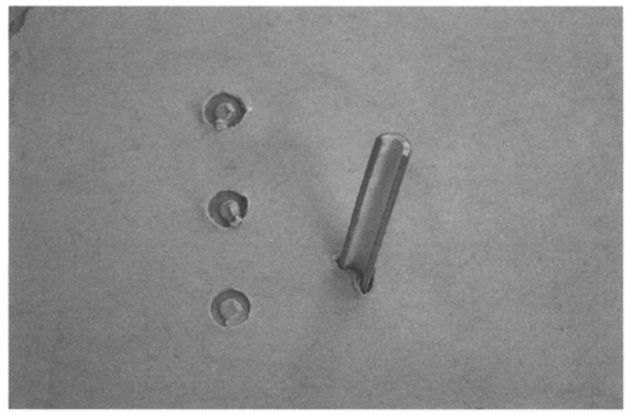
施文具である円形竹管を押捺する方法。施文具の形態がそのまま表出され、安定した文様が得られる。

B



半截竹管文を施文具とし、土器面に垂直に押捺し、弧を組み合わせて円形文とする方法。

C



半截竹管を施文具として、土器面に垂直に押捺しながら回転する方法。回転度合により「の」字状の痕跡や、不安定な形状を示す場合もある。

3　「円形竹管文」施文法

図1

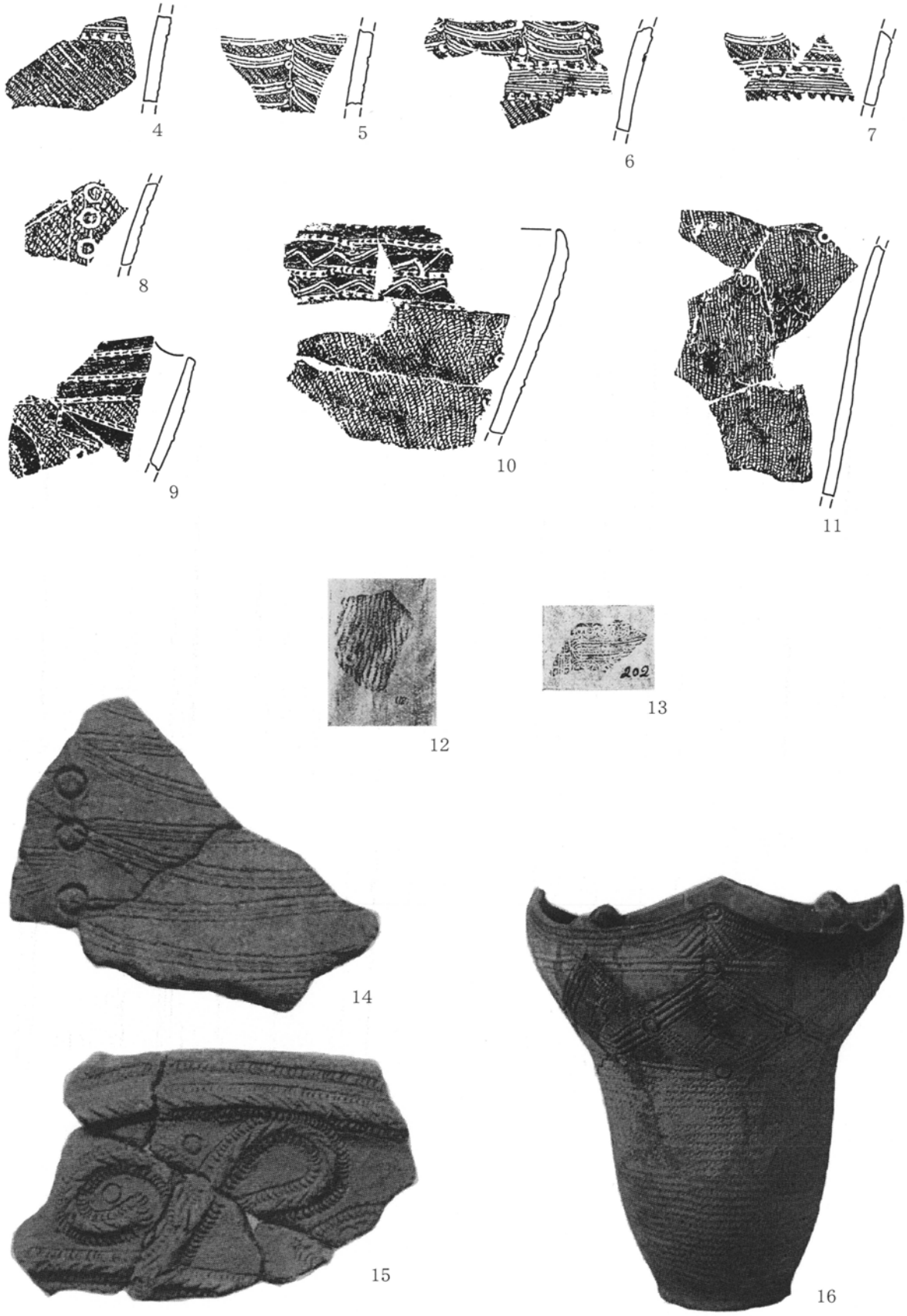


図2